

はきものをそろそろえる

曹洞宗宮城県宗務所がテレビ・コマーシャルを作りました。ひとつは「はきものをそろそろえろと心もそろろ編」。もうひとつは「お参りに行きましょう編」。宮城テレビと東日本放送と東北放送で、七月後半から九月中旬まで流れます。

さて、ラジオからは新興宗教系のコマーシャルが絶えず流れ、新聞を



見れば、やはり新興宗教系の雑誌の広告が毎月掲載されています。文化人や芸能人の名前がはなやかに並ぶその新聞広告は、一般雑誌と見分けがつきません。

『葬式は要らない』(島田裕巳著)が何万部を突破したとか、『戒名は自分で決める』(同)といった本の広告が新聞に踊れば、「そんなのかなあ」と思っかたがたがいらつしやるかもしれません。

そういう状況に対し曹洞宗は「普段の増務こそ大事」と黙々とお葬式やご法事をしていれば良いのでしようか。信用の土台となるものは確かに僧侶の普段の努力であり、宗侶としての人格の高さでしょう。しかし、インターネットを含め、メディアの普及(を越えた「氾濫」)はますます、なにを選び、どれを信じたらよいのか全くわからない様相を呈してきました。

そういうなか、我が曹洞宗もマスメディアを使って、檀家さまに指針を示したり安心を届けることが必要になってくるだろうことは、かなり前から先輩諸兄が考えていたことでした。

しかし、パソコンの画面をさらに見ていくと、私はまた憂うつになってしまいました。投稿欄に、こんな言葉が貼りついていました。

「葬祭業者の宣伝行為だ」(牛豚にしてみりや食肉にされようが殺されて埋められようが殺されるのにかわりない)：なんと殺伐とした投稿でしょう。インターネットは修羅の場なのではないか?

毎朝玄松院の鐘を撞きにくる上戸の伊藤喜美男さんは現在十五頭の牛を飼っています。「口蹄疫がこっちさ入ってきたら牛飼うのやめつべど思っておりました」と穏やかな口調で語る喜美男さんは、自分が育てている牛を、むごたらしい殺処分にする

心情に思いをはせて命の尊さを見直す機会にしたい」という社長のあいさつは立派です。



獣魂碑

今回のCM出稿、つまりメディアにお金を出して、こちらの意のとおりに伝えたいことを伝える手段は、実際どれくらい効果があるものなのか、また準備を含む付帯作業にはどれくらい手がかるものなのか、そのノウハウを重ねていく第一歩となるものです。

「はきものをそろそろえろと心もそろろ編」の内容はこうです。「夏休みこども坐禅会」にこども達が集まっています。沢山の靴が玄関に煩雑に脱がれています。ひとりの少年が同じように靴を脱ごうとすると、目の前に和尚さんが立っています。目が合ってしまった。怒ってはいないようです。むしろ優しい顔をしています。少年は靴をきちんとそろえて脱ぎました。すると和尚さんは、煩雑に脱がれている靴を黙ってそろえ始めました。少年も真似しました。最後のシーンは、こども達が背筋を伸ばして坐禅をしています。そこに「はきものをそろそろえろと心もそろろ」というテロップが流れます……。

このCMは昭和の名僧、藤本幸邦老師の詩を土台にしています。はきものをそろえろと、心もそろろと心もそろろと、はきものもそろろとぬぐとくにそろえておくと、はくときに心がみだれない、だれかがみだしておいたら

エポ・ライヴ!

●玄松院「大施食会」百灯籠
八月十七日 夜六時

くらいなら、育牛をやめようと決心しているようです。

「市場に出す前の日、体を洗ってあげると、牛は大っきな涙を流すんですが」と喜美男さんの奥さんは語ります。牛豚を飼っている人にとつては、無念極まりない殺処分と、育て終わって感謝と切なさの入りまじった気持ちで市場に送り出すのと、心のありようがまったく違うのではないのでしょうか。

先日の日曜日の午後、米山町にある宮城県食肉流通公社に行ってきた。牛や豚はここで肉にされま

す。私は、慰霊碑がどうなっているか見たかったです。敷地の一番奥にあるのなら見られないかもしれない、というか、慰霊碑があるかないか確認できないかも。アポをとつていなかったもので、そのときはあきらめるつもりでした。「獣魂碑」は正門のすぐ右脇の小山に建っています。十歩も歩けば碑の前に立てる距離です。入ってじっくりみました。

「獣魂碑」の前には線香を焚いたあとがあり、花とお茶があげられています。花もお茶も新しく、供えたばかりであることがわかります。私はなんだか安心して、手を合わせま

だまってそろそろおいてあげようそうすればきつと

世界中の人の心もそろろうでしょう。家に入るときに靴を脱がない欧米人には、「またはくときのために」という発想がありません。この素晴らしい日本の文化を私たちは、いつのころからか、おろそかにしてきたのではないのでしょうか。

藤本幸邦老師の「世界平和なんてものは、はきものをそろえることからしか始まらないんだよ」という視点は、理想論などではなく、足元をしっかりとみつめた禅僧の、聡明な示唆だと思っうのです。

こういう大先輩の声に耳をかたむけ、お茶の間のみなさんに「いかがでしょう」と提示する作業から、マスメディアを利用した広報活動を始めてみよう、と宮城県曹洞宗宗務所の執行部は考えているようです。

した。

わが曹洞宗の教典である修証義に「畜類なお恩を報す、人類いかでか恩を知らざらん」という一節が出てきます。動物でも恩返しをするんだから、人間が報恩感謝に生きなければならぬのは尚更である、という意味です。この一節には前段があって、助けた雀が人間に恩返しをする話と、同じく、助けた亀が人間に恩返しをする話、二例がひかれてい

ます。それを受けて「畜類なお恩を報ず」動物さえ恩返しをするのだから、という一節が導かれるのです。殺処分された牛や豚はどんな気持ちで死んでいったのでしょうか……。

お経に出てくる雀や亀は、人間が助けたから恩返しをしたのであり、理不尽な仕打ちをされたのでは、恩など返さないのではないのでしょうか。

あの世には理不尽な死にかたをした霊がただよっているといま

す。それらの霊も浮かばれますよ

うにと、慈悲の心で、あまねく食

を施すのが、お盆の「大施食会」百

灯籠です。今年の大施食会では、

二十七万頭の畜類の安寧も願い、手

を合わせたいものです。

玄松院 寺報

副住職編集



〒987-0024 宮城県遠田郡美里町中坪字十二神117

三浦 正恵

牛を思う

口蹄疫により宮城県では、六月末までに、二十七万頭の牛豚が殺処分されたそうです。すごい数です。なんともやるせません。これが、宮城県ではなく宮城県で発生していたらと考えると背筋が凍りつきます。

供養はしているのかなと思っ、パソコンで検索してみたら大分県日田市で葬祭業を営む社長の呼びかけで慰霊祭がおこなわれていました。牛や豚が遊ぶ野山をイメージした祭壇の前で市民が手を合わせています。「殺処分された動物や畜産農家の